



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	典型調査の意義について
Author(s)	佐藤, 博
Citation	北海道大學 經濟學研究, 13, 235-244
Issue Date	1957
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31049
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P235-244.pdf



典型調査の意義について

佐藤 博

- 一、はしがき
- 二、典型の意義
- 三、調査における典型調査の意義
- 四、統計調査と典型調査
- 五、結論

一、はしがき

社会科学の研究において、典型的なものの認識が、大きな役割を演ずるが、社会科学の一研究方法をなす統計方法において、典型調査は如何なる意義を有するかを明らかにしようとするのが、本稿の課題である。

けだし、わがくにおいて、戦後、いわゆる「科学的な」調査方法として、任意標本抽出調査法が、あるいは官庁統計に、あるいは民間の調査に、広汎に普及しているが、その「科学性」に対する批判があらわれるとともに、一部調査のひとつとしての典型調査が新しく論議の対象となつてゐるからである。

従来、典型調査は、ドイツ社会統計学派において、「標本詳査 typische Einzelbeobachtung」(G・V・マイヤ)と

か、「典型的個別事例の研究 *Untersuchung typischer Einzelfälle*」(F・シジェック)と呼ばれ、「統計調査代用法」のひとつとして研究されてきた⁽¹⁾。われわれは、このような典型調査の意義を最近の論議に焦点をしぼって考察してみることとする。

しかし、本稿は、典型調査の技術的細目に至るまで論じようとするのではなく、まず、社会科学における典型認識の意義を明らかにし、つぎに、調査論における典型調査の役割を規定し、さらに、典型調査と統計調査との関連を明らかにし、そして最後に、統計学における典型調査の意義を明らかにする。

註 (1) G. von Mayr : *Statistik und Gesellschaftslehre. Erster Band. Theoretische Statistik*. 2. Aufl., Tübingen 1914. S. 9 ff.

F. Zizek : *Grundriß der Statistik*. 2. Aufl., München 1923. S. 200 ff.

derselbe : *Nichtkorrekte statistische Verfahren. Allgemeines Statistisches Archiv*. Bd. 21. 1931.

Vgl. P. Flaskämper : *Die Rolle der Schätzung in der Statistik. Allgemeines Statistisches Archiv*. Bd. 32. 1943.

二、典型の意義

社会科学の任務は、歴史的具体的な存在のなから、必然的なもの、本質的なものを取りだし、現象の静止の映像たる法則を明らかにすることにある。

複雑な社会現象のなから、必然的なもの、本質的なものを取りだすためには、自然科学と違って、実験も化学上の試薬も役にたたないので、分析的抽象的方法が使われねばならない。分析的抽象的方法によつて、歴史的具体的な存在から、偶然的攪乱的要因を取り除いたものが、「論理的なもの」に他ならない。

ところで、典型とは、社会現象の本質、必然性を担うものであつて、その現象の歴史的経過における法則性を暗示

するものである。

社会現象にかんする認識において、思维過程は、その進行において、典型的なものの歴史的経過において暗示する法則性によつて、絶えず修正されなければならない。かくして、抽象的で理論的に一貫した形態での歴史的経過の映像にはかならないところの「論理的なもの」の認識がえられるのである。それ故、典型的なものの認識は、「歴史的なもの」と「論理的なもの」との統一の媒介物をなすといえよう。

このような典型は、歴史的具体的な社会現象そのものから、また、それを反映する歴史的材料、およびそのひとつの形態としての統計資料からえられねばならない。

統計資料は、歴史的材料の一形態であり、歴史的具体的な社会現象の量的側面を反映し、何らかの統計調査の結果、えられたものである。

しかしながら、歴史的材料およびその一形態としての統計資料は、そのままの形では典型になりえない。特定の社会科学の理論にもとづいて、大量的な批判的により分けられた完全にわがものとされた歴史的材料、および批判的に加工された統計資料のみが、典型の獲得のために役立ちうる。それ故、何が典型であるかは、それまでに到達された社会科学の認識が、「仮説」として役立たねばならぬ。このような「仮説」によつてえられた典型を、理論的に分析し、抽象的で理論的に一貫した形態での歴史的経過の映像に合致した法則をうることによつて、「仮説」は証明されたものとなる。

一般に、社会科学において、一定の実践的要請にもとづいて研究が行われる。そこには解決されねばならぬ問題があるからである。この問題を解決するためには、まず、問題を提起し、問題の内容が明らかにされねばならない。そのためには、概略的な調査とその問題の理論的分析が行われねばならない。このようにして、問題の内容が明かにさ

れたならば、問題を解決するためには、さらに、系統的で綿密な調査活動と、理論的分析が併行して行われねばならない。このような社会科学の認識の過程において、典型認識は理論の獲得と理論の検証のために大きな意義をもつ。

三、調査における典型調査の意義

一般に調査とは事態の客観的把握のことである。そして調査は、一定の目的のもとに、現実の諸関係を客観的に、科学的に把握せんとする目的で行われる。したがって、調査においては、まず何らかの実践的要求が前提とされることは明らかであり、目的をもたぬ調査などはない。すなわち、一定の実践的要求があれば、この要求を充すためには、社会的経済的諸関係において、これらの諸関係に働きかけねばならない。そうして、このような行動のための規定をうるためには、現実の諸関係の実態を明らかにしなければならない。

そのさい、国家や企業が、一定の政策を立案し、その効果を測定するために行う調査と、理論の獲得のための現実の分析、あるいは特定の理論の検証のための現状の究明を目的とする調査とを、一応区別しなければならない。

しかしながら、この区別は、調査目的による一応の区別であつて、特定の政策の立案、およびその効果測定を目的とする国家やその他の団体の調査は、いわゆる「老大な官庁統計」をうみだし、その批判的加工は、理論の獲得、検証に役立ちうる。

調査目的が一応規定されると、何を調査すべきか、ということ、すなわち、調査対象が大体きめられる。しかし、この調査対象は、一応のものであつて、調査の進行とともにその範囲領域は自ら変更しなければならない場合も生ずる。だが、この調査の対象は、調査担当者の社会科学上の知識と経験によつて規定される。

それ故、官庁統計の批判的加工に際しては、調査者のイデオロギーおよび社会科学の認識そのものが、まず批判吟

味されなければならぬのは当然である。

つぎに、調査方法にかんして、まず、調査対象の質的側面をとりあげる質的調査法と、量的側面を主としてとりあつかう量的調査法とを区別しなければならない。もちろん、歴史的具体的な存在たる社会現象は、その質的側面と量的側面を統一的に把握して、はじめて、具体性を得るのであるが、社会現象の数量的側面を客観的に把握するためには、対象を集団（大量）たる存在として「統計調査法」なる特殊の研究方法が利用されねばならぬ。統計調査法には「大量観察法」と「大量観察代用法」とがある。

統計調査にかんして注意しなければならないのは、いわゆる「統計的観察の方法」である。これは、対象が質的であるか、量的であるかの区別なく、個別的存在あるいは個別事例によつて、理論的にその一般性ないしは共通性を把握できない場合に、これを集団として（すなわち、「解析的集団」を構成して）観察しなければならない。この方法が、いわゆる「大数観察」と称せられるものである。

ところで、典型調査は、大量観察代用法のひとつである。大量観察代用法は、大量観察の実施が困難か、不可能の場合、また、それが必要でない場合に、大量観察の技術的過程を一部省略して行う方法である。大量観察代用法には、(1)推算、(2)一部調査、(3)アンケートなどがある。典型調査は、一部調査を、(4)一部の理論的規定による選択、(5)一部の任意抽出調査、と分けた場合に、前者の特定の場合であつて、典型的とみなされる条件を根拠にして、社会科学の知識にもとづいて選択された調査対象を調査するものである。従つて、ドイツ社会統計学派のいわゆる「標本詳査」と、簡単な二、三の標識についての標本調査を含むものである。

典型調査は、量的調査のひとつとしての統計調査法の一つである限り、ただ統計値の關係を量的に規定しうるだけにすぎないが、調査が、現実的な諸關係の実態を明らかにするものであるならば、理論的分析と歴史的追求とが、調

査活動にともなわねばならない。

そうして、こうした理論的規定の正しさが、典型調査の結果の信頼性を保障するものである。

また、典型が、社会現象のうちで、本質的なもの、必然的なものを担うものであるかぎり、必ずしも、大量的な集団をなしていない場合があつても、典型調査の対象となりうる。なぜなら、集団的存在（大量現象）が、生成発展して、消滅するものであることを認識するならば、先進的なものが、やがて大量現象にまで成熟することを洞察しなければならぬからである。¹⁾

社会科学の研究において、理論の獲得、検証において、歴史的材料（およびその一形態としての統計資料）の批判的加工により、あるいは、現実の諸関係のなから、典型的なものをとりだし、社会経済的諸形態の典型を描写することは、極めて大きな意義をもたねばならない。

その際、典型的なものを選択し、その一般性を保障するものは、大数法則や確率論ではなくて、社会科学の理論でなければならない。そして、この社会科学の理論は、一つの典型から、さらにもう一つの典型へという調査実践によつて、新しい認識へ進みうるのである。

従つて、われわれのいう典型調査は、現実の社会現象のなから、社会科学の特定の理論にもとづいて、直接に典型的なものをえらびだすことと、歴史のおよび統計的材料の批判的加工によつて、典型的なものを描き出すことを含むものである。

このような典型調査によつて、現実の諸関係の実態を、量的側面のみならず、質的側面をも規定しうるであらう。

註 (1) N. G. Gratschow ; Statistische Gruppenbildung. Uebersetzung aus dem Russischen. Berlin 1953. S. 91.

四、統計調査と典型調査

以上において、われわれは、典型調査が、統計調査法のひとつとして、調査において重要な意義をもつことを明らかにした。そして、典型調査を、量約調査のひとつである統計調査法のひとつであると規定する場合でも、社会的諸関係の実態を明らかにするさいには、質的調査の特色をなす理論的分析と歴史的追求が無視できないことを指摘した。しかるに、最近の数理統計学派の調査論において、典型調査を質的調査のひとつであるとして、統計調査法から排除しようとする見解がある。その代表者として、津村善郎氏の著書『調査の話』をとりあげてみよう。本書は、同氏のその後の著書『標本調査法』(岩波全書)に対して、「統計調査の分類、統計調査の一つの技術としての標本調査の役割とその構造を明らかにすることを中心として書かれたもの」であつて、『標本調査法』の方は、「その技術編」であると云われる。⁽¹⁾それ故、われわれは、『調査の話』を中心にして考察を進めるであらう。

まず、津村氏は、統計調査法を規定して、「統計調査とは集団測定である」と云われる。⁽²⁾更に、「標本調査は統計調査のための一つの技術である」と主張され、⁽³⁾それ故、「標本抽出と推定の問題に限つていえば、社会調査の場合でも、……自然的な対象の場合でも、同一の理論が適用される」と述べておられる。⁽⁴⁾

このように規定された統計調査は「実態調査」と区別しなければならぬ、と津村氏はいわれる。その理由は、「目的」が異なるからである。すなわち、津村氏によれば、実態調査の「真の目的は量的なものでなく……質的なものである。」また、氏によれば、典型調査は実態調査の一種であるから、統計調査に含まれない、といわれる。⁽⁵⁾

そして、典型調査について、「何をもつて典型とするか、その調査結果と同じ性格を持つものの比重はどの程度に存在するか。これも正確には統計にまつよりほかはないであらう。統計なくしては、この判断は名人芸の勘に頼るか、

盲人の象をなでて判断する誤りに陥りやすい」と述べておられる。⁽⁶⁾

すなわち、津村氏にあつては、統計調査法の問題とする集団は、単なる「集団」なのであつて、歴史的具体的な社会的集団現象であつても、自然的な集団であつても構わない。それ故に、統計調査の一つの技術である標本調査は、社会調査の場合でも、自然的な対象の場合でも、適用しうると主張されるのである。

しかしながら、調査という実践は、現実の社会的諸関係のなかにあつて、その実態を客観的に把握せんとする社会的な活動であつて、そのかぎり、社会調査の場合と、自然的な対象の場合とは、はつきり区別されなければならない。社会的な諸関係の実態を、その量的側面において、そして、社会的な集団現象（大量）として、客観的に把握しうるためには、その対象に則した統計調査法という特殊な方法規定が必要なのである。

また、典型調査は、われわれがすでに前節で規定したように、社会調査のうちの量的調査法のひとつである統計調査法のひとつとして位置づけられる。典型調査は、一定の社会科学の理論にもとづいて、典型的とみなされる条件を根拠にして、えらびだしたものを調査するので、質的調査法の特色をなす理論的分析と歴史的追求をとまなうのであるが、量的規定としては、いくつかの統計値の関係を明らかにしうるものである。したがつて、調査目的が量的でないという理由で、統計調査から排除しようとするのは、極めて根拠が薄弱であるとおもわれる。

もつとも、デミングのように、統計理論を専ら統計解析の数学的手法と解して、「有意標本」を全然論外におくというのならば、それも一理があると考えられるが。⁽⁷⁾

しかしながら、調査論の課題が、事態の客観的把握にある以上、数学的手法（主として確率論）を使えるか、使えないか、によつて調査の種類を区分するのはおかしくはないだろうか。

さらに、津村氏が主張されるような、典型調査が統計をまつて正確性を保障しうる。ということとは、旧くから論じ

られていることであり、例えば、G・v・マイヤは、「統計学の見地からすれば、一定の社会現象の典型形相 *die normale Gestaltung* として信頼しうるものは、悉皆集団観察を行つた後に事後的にのみ、はじめてこれを判定しうるものなのである」と述べている。⁽⁸⁾

だが、このような「循環論法 *Zirkelschluss*」に対しては、P・フラスケンパーのつぎのような批判が妥当する。——「この批難は完全にあてはまらない。というのは、典型的なものはいさばすでに調査以前に、統計外の経験にもとづいて認識することができからである」⁽⁹⁾と。

このことは、一つの典型から他の典型へと進み、一定の社会科学の理論が、最初、仮説として役立ち、調査実践によつて検証され、理論的認識が、一步一步、事実との対決によつて深化するという社会科学の方法をあらわすかぎり、極めて当然といわなければならない。

註 (1) 津村善郎『標本調査法』(岩波全書)二〇九ページ。

(2) 同氏『調査の話』一三ページ。

(3) (4) 同氏『標本調査法』一ページおよび六ページ。

(5) 同氏『調査の話』一五—一六ページ。

(6) 同右、一六ページ。

(7) W. E. Deming; *Some Theory of Sampling*. New York 1950 (斎藤金一郎訳『標本調査の理論』一三ページ)「本書においては専ら確率標本を取り扱う。すなわち本書は統計理論の書なのであつて、調査内容や数字のいじくり方の書ではない。有意標本は、著者の知る限りにおいては統計解析の対象とはならないものである。」すなわち、デミングが、ここでいう「統計理論」なるものは、確率論に基礎をおく統計解析法のみが考えられていることは明らかである。

(8) G. von Mayr; *a. a. O.*, S. 16.

(9) P. Flaskämper; *Grundriß der Statistik. Erster Teil, Allgemeine Statistik*. 2. Aufl., 1949. S. 178.

五、結 論

われわれは、典型の概念を、社会現象における本質的なもの、必然性を担うものであり、社会現象の歴史的過程において法則性を暗示するものである、と規定した。かくして、典型的なものの認識は、社会科学の方法、とくに経済学の方法において、論理的なものと歴史的なものとを統一する媒介物であることを明らかにした。

更に、調査論において、社会現象のうち、集団たる存在（大量）を数量的に把握する場合に、統計調査法を大量観察法と大量観察代用法に分け、典型調査が、大量観察代用法のひとつであることを明らかにした。

かくして、典型調査を統計調査法から排除せんとする津村氏の見解は根拠薄弱であることを指摘し、そして統計なくしては典型の正確性を保障しえないという、いわゆる「循環論法」に対しては、科学的認識が、一定の理論を「仮説」として、調査実践を媒介にして、絶えず認識が深化してゆくということの一断面しか見ないものであることを指摘した。

しかしながら、われわれは、全数調査や任意標本抽出調査法が、それぞれの対象によつて適用されうることを否定するものではなく、社会科学の一研究方法としての統計方法における典型調査の意義を明らかにすれば足りるのである。

一九五七年十月

〔追記〕 本稿執筆後に、津村氏の見解に対する詳細な批判が発表された。

上杉正一郎「統計調査の社会性——津村善郎氏の著者を読んで——」『経営研究』第三十号参照。

なお、同氏は経済研究における統計の意義についても本稿執筆後左の論文を発表された。

「経済統計学の基礎的問題——経済研究における統計の意義——」『思想』第四〇一号、一九五七年第十一号参照。